SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№15
2022.12

インクルーシブ教育の充実に向けて

～「自分はできる」・自己効力感を高めるために～

今号では、熊谷恵子先今号では、生（筑波大学人間系障害科学域教授）にお話を伺います。

熊谷先生のご経歴からお聞かせください。

九州大学の理学部で、物理化学を勉強しました。その後、血液検査の会社や科学技術庁の外郭団体である「新技術開発事業団」で、様々な研究に携わりました。例えば、脳の神経細胞にあるチャンネルについての研究でした。次に、ニューラルネットワーク（主に視覚の後頭葉のニューラルネットワーク）をテーマとして、研究を行いました。細胞のひとつひとつを、物理学的な振動子にみたてて、その動作をプログラムし、脳がどのように新しい記憶を作っていくのかを研究していました。言うなれば「人工知能」の研究の一端でした。研究を進めていく中で「脳を模倣するなんて、あと何十年もかかるだろう」、「その間に実際に人を診ていき、その人たちのことを助けられる、支援ができる立場で脳のことを考えていきたい」と思い、現在の道に至っています。

現在の研究テーマである「学習障害」についてお聞かせください。

当時、スピーチセラピスト（言語聴覚士）は、国家資格ではありませんでしたが、例えば、脳出血を起こした患者さんの場合には、「脳のどの部分が傷害されると、どういう喋り方をする」などの、因果関係がはっきりしており、対象者の脳の状況を見ながら、障害に対応していけるのではないだろうかと考えていました。しかし、まだ国家資格ではなかったことと、大人の脳を見るための機関が限られていたことから、図書館の本が充実していて、学ぶ環境が整っている筑波大学の修士課程で、「子どもの障害」について研究をすることにしました。脳の中の、どの機能がどのメカニズムに影響を与えているのかを考えて、私なりに「セラピー」や「訓練指導」を行いたいと思っていました。

医者である長畑先生のもとで、先生の専門であった「学習障害」について研究をしました。「学習障害」とは、全体的に知的機能が劣っていないにも関わらず、「読む」「書く」など一部に習得困難なことがある状態のことです。脳のことを考える時に、「読む」「計算」など、一部だけが学習困難という症状を研究すれば、今まで考え続けてきた脳の機能が分かるのではないかと思っていました。しかし、脳の機能の障害といっても、MRI で撮影すると分かるというような大きな損傷があるわけではなく、例えば、脳性麻痺の場合でも、電子顕微鏡レベルで見ないと損傷部分が分からない状況であると知りました。大人のケースでは、明らかに脳梗塞とか脳出血等があって、一部の機能が働かなくなっているという症例は、実は、かなり特殊なことだと知りました。脳に目に見える所見が無くても、いろいろな症状が出てくることが分かり。子どもを選択したことは、私にとっては、とても良かったのだと思います。「学習障害」が、今の研究の発端になっています。

研究や実践のなかでの先生の思いについてお聞かせください。

子ども一人一人を見ると「この子にこう指導したら、こうなるのではないか」と自分なりに推測できますが、それを通常の学校の中の通級指導教室の先生達にどうやって伝えていけばよいのか?という点が、現在の課題のひとつです。「教育相談」をして、「臨床」をしながら、どのように伝えていけばよいのかを考えていくことが重要なことであると思っています。教育相談をしていて、教育相談は「公教育で担われていないこと」「子どもがこういうことに困っているということを吸い上げること」が、とても重要なのだと感じています。教育相談こそが、今後どのようにして教育をしていけばよいのかという教育のこれからや教育の問題点が分かる切り口になるところだと思います。教育相談に来た子どもの問題解決をしていくことで、今の公教育に足りないことを把握して、発信していかなければならないと思っています。

現在は、「算数障害」「ソーシャルスキルトレーニング」「コーチング」「アーレンシンドローム（視覚の過敏症）」などに取り組んでいます。特に、人間にとって視覚は外界の 80%を取り入れる器官なので、そこが上手く機能しないと、日常生活上で大変困ることが起こり、「学習障害」や「ADHD」などの他の問題に間違われることもあります。しかし「カラーレンズ」をつけることで、解決できます。著書でも紹介していますが、「算数障害」と「アーレンシンドローム」については、今後、研究として、まとめていきたいと考えています。

特別支援教育に期待することについてお聞かせください。

筑波大学でも、特別支援学校の教員免許法認定公開講座などを実施し、免許取得に貢献していますが、今の日本において、「特別支援学校の教員免許」はありますが、「特別支援教室（通級）の免許」は存在しません。「特別支援教室（通級）」は、インクルーシブ教育システムにおける通常教育の中で、各学校で「主訴に対する指導」が受けられる唯一の場所です。しかし、適切とは呼べない指導が少なくないのも現状のようです。子どもが、高い能力を持っている場合、その部分にアプローチする指導が良いと思いますが、反面の不足している部分のみトレーニングしているような場合が多々あります。知的障害を伴う子ども達の「特別支援学校の指導」と、突出した才能を持つギフテッドや知的障害を伴わない発達障害の子達の「特別支援教室（通級）の指導」では、内容がかなり異なってきます。私は、筑波大学が率先して「特別支援教室（通級）」についての情報を公開講座等を通してさらに広く発信できるようになると良いと考えています。どの子も「自分はできるという達成感」や「自己効力感」を持ち、「自尊感情」が尊重されていくことを願っています。これからも、通常学級で取り残されてしまっている子どもが、「楽だな」「快適だな」と思えるように、学校教育が進む方向を支援していこうと思います。

＊　＊　＊　＊　＊

このインタビューは 2022 年 11 月 16 日に附属学校教育局４階ラウンジで行われました。

（聞き手：連携推進グループ　根岸由香）

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

「チーム視覚」の素晴らしさに触れて

～附属視覚特別支援学校　附属視覚小学部と千葉県の人事交流を通して～

千葉県との人事交流（３年間）で 2020 年４月より附属視覚にて勤務されている小川瑞季先生にお話を伺いました。

千葉県の学校で担当されていた業務及び附属視覚での業務内容について教えてください。

千葉県立盲学校には 9 年間勤めました。小学部で２年間担任した以外は、支援部で通級指導教室や教育相談を担当しました。当時、千葉盲学校本校教室の他、浦安市や柏市、君津市にサテライト校があり、通常の小中学校に通う児童生徒を対象に、単眼鏡の指導を中心とした自立活動の内容を指導していました。また、千葉県各地域で「見え方相談会」を開催し、見え方に困難のある幼児児童生徒への支援をしていました。

附属視覚での実践で印象に残っていることを教えてください。

印象に残っていることがたくさんありすぎて選べないのですが、附属視覚と千葉盲の一番の違いは、児童の在籍数だと思っています。千葉盲は１クラスに児童が１～３人ぐらいだったので、比較的大きな集団での学びができる附属視覚の環境にすごく圧倒されました。児童同士で学び合うことができる中、教師がどのように振舞うか、どのように授業を展開すべきなのかを学ばせていただきました。他には、縦割りの活動や学部全体の行事で、高学年が下学年を引っ張っていくとか、下の学年が上の学年を見て成長していくという姿に興味を持って見守っていました。

これまでのご経験を踏まえ、附属視覚の良い点、改善すべき点について忌憚のないご意見をお聞かせください。

県立では学級経営に対して縛りが多い中、附属視覚は自由にのびのびと、担任が考えたことをほとんど実現できる環境だったことが、私にとってやりやすかったです。例えば、「今この学習で、この児童に、こういう体験的な学習がしたい」と思ったら、校外に自由に行けたり、回数とか場所とかも制限なく実践できたりしたことがよかったです。

あとは先生方が、ずっとここで同じメンバーで働いていることでチームワークがすごいと思いました。例えば、行事一つにしても、私一人だけ知らないということもあるのですが、皆さんが、計画書に書かれていない細かな動きも、それぞれの先生が熟知し、その行事に向かってとても合理的に進めていくチームワークが素晴らしいと思いました。県では異動が多いこともあって、毎年初めての人が半分ぐらいいるという環境なので、やり方を変えなくてはいけなかったり一からみんなで進めなくてはならなかったりするところがあったなということを思いました。

附属視覚での勤務は残りわずかとなりました。今後の抱負をお聞かせください。来年度以降、附属視覚に人事交流で赴任される先生方へのアドバイスをお願いします。

今、担任させていただいている児童と関われる時間を、児童の成長のために精一杯使いたいと思います。どの学校、どの児童を担当、担任していても、教員として私ができることを考えて、目の前の課題に一つずつ取り組みたいと思います。

人事交流という機会をいただいたことで、視覚障害教育に携わってきた教員として、県立学校とは異なる経験を広げる機会をいただいたことに大変感謝しております。

人事交流は、県内の異動とは全く異なる、特別なチャンスだと思っています。附属視覚でしか味わえない特別な時間、本校にいらっしゃる多くのスペシャリストから多くのことを学ぶ機会に恵まれたと感謝しています。

Practice report

実践報告

インタビューを終えて

千葉県に戻られた後、視覚障害教育に携わる他の教員の方々へ小川先生が指導する立場になられることもあると思います。今後のご活躍を陰ながら応援しています。

＊　＊　＊　＊　＊

（聞き手：連携推進グループ　中村里津子）

令和４年度　現職教員研修について

今年度、4 月から研修を始めた 2 人の先生のうち、専門性向上研修コース（6 か月）の新井幸子先生（埼玉県立日高特別支援学校）は、9 月 30 日で修了となりました。附属桐が丘と附属視覚で実践実習を行い、「自立活動を主とした教育課程における教科指導の実際 - 各教科で育成を目指す資質・能力を踏まえた単元づくり -」のテーマで研究をまとめました。報告会は東京キャンパスと附属桐が丘、附属視覚を Zoom でつないで実施しました。新井先生の益々のご活躍を祈念いたします。

10 月 17 日には、三上亨先生（青森県立青森第二養護学校）が、1 か月の指導力向上研修に入りました。実践実習は附属大塚特別支援学校でおこないました。テーマは「生徒の実態と指導内容との関連性」でした。1 か月の間、熱心に様々な情報を収集され成果をまとめました。また、12 月 5 日からは、澤田佳菜子先生（鳥取県立鳥取聾学校）をお迎えし開講式を行いました。早速、翌日から附属聴覚特別支援学校で実践実習に入っています。

4 月から 1 年間研修を進められいる中島恵先生は、12 月 22 日で附属視覚特別支援学校の実習を終えています。附属視覚では小学部での授業づくりを中心に実習を行いながら、他学部の参観や校外学習にも参加しています。また、寄宿舎で寄宿舎生とともに生活することを通して、研修を更に深めています。これらの実践をもとに、1 月からはご自身のテーマに沿った研究をまとめて行く予定です。

モニターの中の先生たちも一緒に　修了の記念撮影
（新井先生かは右から 3 番目）

雷坂次長から修了証書を授与される三上先生

令和４年度筑波大学公開講座「特別支援教育の教材・指導法の基礎」について

11 月 23 日（祝）に、オンライン（リアルタイム）で、グループ教員 5 人が講師を務め、公開講座「特別支援教育の教材・指導法の基礎」を開催しました。この講座は、コロナ禍でオンラインになったのですが、以前から毎年当グループが対面型で開いてきたものです。

現職教員や教職を目指す学生のため、特別支援教育の基礎的内容で、5 つの障害種（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、自閉症）に応じた教材や、それを活用した指導法の基礎について講義を行いました。教材・指導法データベースに掲載している教材・指導法や「授業を豊かにする筑波大学附属学校の教材知恵袋　教科編」「自立活動編」（ジアース教育新社）の 2 冊をテキストにし、様々な教材を紹介しながら、講義を進めていきました。受講した方々から、「学んだことを早速明日から試してみたい」、「指導の引き出しが増えた」、「自分の実践を反省する機会になった」、「他の障害種のことを知ることができてよかった」「同僚に伝えたい」などの意見が出されました。グループの教員としても、改めて他の障害と共通する指導法について理解することができ、また経験の浅い特別支援教育の現職の先生が期待している講座の内容を知ることができて、とても勉強になりました。参加された先生方のご意見を来年度の運営に生かしていきたいと思います。

「知的障碍児者の教材・指導法について」の講義

附属特別支援学校 5 校・特別支援教育連携推進グループ・
人間系障害科学域の協働による筑波大学特別支援教育指導法
データベースはこちらから↓

https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/

JICA2022 年度課題別研修「インクルーシブ教育実践強化～全ての子どもを支える授業づくり～」

11 月 10 日（木）～ 12 月 9 日（金）の 1 か月間、上記のプログラムにボリビア、コロンビア、コスタリカ、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラスの国々から、特別支援教育に携わる様々な職種の 7 人が参加されました。プログラムは、筑波大学人間系障害科学域の野呂先生、米田先生、左藤先生を中心に実施され、連携推進グループは、研修の最初に行われるオリエンテーション・インセプションレポート発表への参加、授業づくりについての講義・演習、最後に行われるアクションプラン発表会への参加を担いました。特に、11 月 29 日、30 日の 2 日間は、東京キャンパスに場所を移し、連携推進グループ教員 5 人で、講義・演習とそれらの運営を行いました。

写真①は、本グループが運営する「教材指導法データベース」を参加者がそれぞれのパソコンで検索した後、自国で活用できそうな教材をピックアップし、その理由などについて発表している場面です。高価な物でなく手軽に手に入る物、簡単に作れる物、自身が携わってる子供たちや、担当教科の指導に使える物など、選択した理由は様々でした。現在、連携推進グループのデータベースは英訳されていますが、まだスペイン語訳はしておらず、スペイン語圏である参加者からは、翻訳への高い期待が寄せられました。

写真②は、盲・弱視体験でシミュレーションゴーグルを着用して、様々な見え方を体験しながら、触読用ものさしと三角定規セットを使っている様子です。また、イヤーマフを着けて音楽を聴く体験も行いました（写真③）。和やかな雰囲気の中に、自国に様々な教材や指導法をもって帰りたいという熱意が伝わってきました。

研修最後のアクション発表会と閉会式では、自国のインクルーシブ教育を推進していこうという強い決意や意欲と、運営に携わった人たちへの感謝にあふれた発表がなされました。

写真①

写真②

東京キャンパスにて記念撮影

写真③

editorial Postscript

編　集　後　記

表紙の素材を集めに久里浜特別支援学校に写真を撮りに行きました。皆既月食の数日後で、副校長の斎藤先生から、学校で撮った皆既月食の早送り動画をもらいました。寄宿舎の上に浮かんだ月が、色や大きさ、輝きを変えながら、静かな黒い空を背景にして上へ上へと上がっていく様子が映っていました。このきれいな月の下で、親元を離れ、すやすやと眠っている久里浜の小さな子供たちのこと、それを何時も忘れず遠くから見守っている親御さんたちのことが思い浮かびました。子供たちや親御さんが安心できる学校、子供たちが伸びていく学校づくりー改めて大切だなと思いました。

（髙尾政代）

2 学期も「公開講座」や「お茶の水附属中学校での出張授業」、「JICA 研修」、「共催セミナー」の準備のため毎日忙しく過ごしました。附属聴覚で仕事をしていたときには、連携推進グループのことはほとんど意識したことはありませんでした。しかし、実際にグループに関わってみると、特別支援教育に関する重要な事項をたくさん担っていることが分かり、5 附属にとってなくてはならないものだと実感するに至っています。責任の重さをさらに強く受け止めながら新しい年を迎えたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

（橋本時浩）

表紙：オマージュ・筑波大学附属久里浜特別支援学校

SNE-T
Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット15 号（通巻 第63）2022年12 月23 日発行
発行 / 編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938
e-mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp
http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/

©2022 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）